

大学生のボランティア参加と継続を支援する ボランティアマネジメントの提案

後藤 正幸研究室
0232042 大場 啓司



1. 研究背景・目的

近年、ボランティア活動に対する関心が高まっている。ボランティア参加人数は年々増加し、2004 年の時点で社会福祉協議会が把握しているだけで約 780 万人である。大半を占めているのは主婦と定年退職者であるが、今注目されているのは大学生である。大学生のボランティア参加は、ボランティア活動の活性化を促し活動の幅を広げ、社会全体の連帯性を醸成することに繋がるといえる[1]。しかし、大学側の対応やボランティア団体の受け入れ態勢は整っていないのが現状である。この現状に対して、これまでの活動を見直し、より円滑で効率的な活動を行うためにボランティアマネジメントに取り組む団体が増加している。ボランティアマネジメントとは、組織的にボランティアの活動を最適化しようとするマネジメントを行うという漠然としたものである。現在は厳密な定義やマネジメント手法はなく、経験や情報を基に各々の環境にあったマネジメントを考えて行っているため、ボランティアマネジメントの確立が必要不可欠である。

本研究では、ボランティアマネジメントの現状を把握し、大学生がボランティア活動をする際にどのような点を重視、注意すべきか、どのような点がボランティア活動の障害となっているかを明らかにし、それを基に大学生のボランティアへの参加と継続を支援するボランティアマネジメントの提案を行うことを本研究の目的とする。

2. 研究方法

(1) 文献調査

ボランティアとそのマネジメントに関する文献の調査を行い、各々の国やボランティア団体のボランティアマネジメントの考え方や要素、現状の把握を行った。

(2) 事例研究

パソコン教室のアシスタント経験のある地域住民からなる“地域ボランティア”と有志の大学生からなる“学生ボランティア”の協働で行う「高齢者を対象としたパソコン教室」に運営側として参加し、事例を通じて大学生ボランティアの行動や考え方などについて参与観察に基づく調査を行った。その中で活動内容や学生ボランティア 24 人を対象としたアンケート調査やインタビュー、他のパソコン教室との比較を行い、ボランティア活動を行う上で重視すべき点や問題点を明確にした。また、その重視すべき点や問題点を文献調査で得られたボランティアマネジメントの要素と対比させ、ボランティアマネジメントの要素をパソコン教室ではどのように行っていたかの把握を行う。

(3) アンケート調査

大学生のボランティア活動に対する意識や経験、現状を把握することを目的としたアンケート調査を本学学生 51 人(有効回答数 40) を対象として行った。アンケートの回答形式は、選択式と記述式で行い、ボランティア活動の経験に関する質問が 15 問、ボランティア全般に関する質問が 7 問、ボランティア活動に対するイメージについての質問が 14 問である。

3. 結果

(1) 文献調査

ボランティアマネジメントの考え方は国や団体によって異なり、ボランティアマネジメントの対象とする範囲にも差異がみられ、ボランティアをマネジメントするということが共通事項であることがわかった。オーストラリアのボランティアマネジメントは、表 1 に示す広義のボランティアマネジメントで、A、B、C すべての範囲を行っている。オーストラリアでは、ボランティア受け入れ組織におけるボランティアプログラムのマネジメントをボランティアマネジメントと呼んでいる。ボランティアプログラムとは活動内容だけではなくボランティアの募集から紹介、実施、評価といったプロセスも含んでいる。イギリスでは A-2 の範囲を対象としている。イギリスでは、ボランティアマネジメントよりも受け入れ組織におけるボランティアサービス部門の組織化(オーガニゼーション)と言われることが多いようである。

オーストラリアやイギリスでは国内である程度概念やその対象範囲が定まっているが、日本やアメリカでは団体や論者によりボランティアマネジメントの対象が異なることがわかった。

表1. ボランティアマネジメントの体系及び要素

広義のボランティアマネジメント	A-1 組織としてのボランティア受け入れ準備 組織内のニーズアセスメント ボランティア活動の使命と方針の決定 ボランティアの受け入れ方針の決定 活動内容の計画と明確化 責任の所在の明確化
	A-2 ボランティアプログラムのマネジメント ボランティアの募集・採用のプロセス ボランティアの評価 オリエンテーション、トレーニング ボランティアの配置 ボランティアに対する窓口の明確化 コミュニケーションチャネルの提供、維持
	B 狭義のボランティアマネジメント 短期プログラムへの対応 有給スタッフとボランティアとの関係構築 予算管理、資金調達 企業のためのプログラム作り ボードメンバーとしてのボランティアマネジメント
C ボランティアと法律のインターフェースのマネジメント	

出典: [2]「ボランティアマネジメントの体系」を基に作成

(2) 事例研究

参加したパソコン教室では、3人の学生がボランティアマネージャーを勤め、3人と地域ボランティアを中心にカリキュラムや運営の詳細・方針の決定を行った。学生ボランティアは準備や運営を中心となり、地域ボランティアは学生ボランティアの受講者への教え方やカリキュラムに関する指摘やアドバイスを行うといったスタンスで行った。また、授業の進め方は学生ボランティアから講師を選出し、講師が前に立って授業を行い、その他のボランティアは学生ボランティアと地域ボランティアのペアで受講生2～3人を担当し質問などに対応するという形式で行った。

ボランティア間の交流に関しては、学生ボランティアを対象としたアンケート調査より、同グループの地域ボランティアとは多少の交流が出来たが、他グループの地域ボランティアとの交流はほとんどないという結果が出た。また、学生ボランティア間の交流に関してはほぼ全ての学生が交流出来たという結果が出た。今回は学生と地域住民という異なるコミュニティが協働で活動を行ったが、準備など学生ボランティアのみで行うことが多く、授業では学生・地域ボランティアともに受講生の対応に追われ、学生・地域ボランティアともに受講生との交流は図れたが学生・地域ボランティア間の交流はあまり進まず、グループ内の連携がうまくいかないということがあった。また、今回はボランティアマネージャーを3人で行っていったが責任の所在や指示系統を明確にしていなかったため混乱を招いた場面も見られた。

(3) アンケート調査

ボランティア活動の経験がある学生25人に「ボランティア活動を始めたきっかけ」を質問した結果、「友人や知人に勧められて」という回答が39%、「自分の自発的な意志で」が17%、「地域からの呼びかけなどに応じて」が11%という結果になった。「ボランティア活動を始めたきっかけ」として「友人や知人に勧められて」、「地域からの呼びかけなどに応じて」、「家族や親戚に勧められて」といった人的ネットワークのみで58%を占める結果となった。

「大学生を主体としたボランティアグループでボランティア活動を行う上」で何が問題となるか質問した結果、「授業の両立」が19%、「部活、アルバイトとの両立」が17%、「大学生以外のメンバーとのライフスタイルの差異」、「引継ぎ」、「指示・連絡系統」が11%という結果になった。

4. 考察

事例研究より、重視すべき点としてコミュニケーションチャネルの確立と責任の範囲の明確化が挙げられた。コミュニケーションチャネルの確立はボランティア活動を円滑にするだけでなくボランティア間の連携を高め、抱えている問題の解決や他人とのふれあいを求めて参加した人の継続参加意欲の支援に繋がると考えられる。また、責任の範囲を明確にすることで決められた範囲内でやるべきことをボランティア自身が考え、決めて活動を行えるため、従来の活動以上の達成感や充実感を与えることができると思われる。

アンケート調査より、ボランティア活動に参加するきっかけとして「人的ネットワーク」を介して参加する人が58%という結果が出たのは、「人的ネットワーク」による募集は事前にボランティア活動の情報を得ることができ、また知人が所属しているという安心感があるためだと考えられる。また、「人的ネットワーク」を介した募集は、募集側は活動内容にあったボランティアを集めることができ、募集以前にその団体が募集方針を確定していれば参加希望者は活動内容を知った上での参加ができるためミスマッチを減らすことができ、双方にメリットのある募集方法であると言える。

大学生がボランティア活動を行う上で時間的制約が大きな障害となっていることがわかった。学生は授業や生活費の確保など回避できない部分があるため、学生のライフスタイルなどを考慮に入れた活動方針や受け入れ方針を考える必要があり、方針を明確にすることで制約を抱えている人でもボランティア活動の参加・継続し易い環境を作ることが出来ると思われる。

5. 結論

大学生の参加、継続を支援するためには、ボランティア活動を行うことによって得られるメリットを示したり、参加し易い環境、居心地のよい環境を作る必要がある。大学生のボランティア参加と継続の支援には、最適なコミュニケーションチャネルの確立、責任の範囲の明確化といったボランティアにメリットをもたらす要素を重視する必要がある。また、その他にも募集方針や活動方針や責任の所在を明確にして、活動や団体の改善を行なう必要がある。

参考文献

- [1]佐々木 正道,「大学生とボランティアに関する実証的研究」,ミネルヴァ書房,2003
- [2]妻鹿 ふみ子,「『ボランティア』をめぐる一考察 ~ ボランティア受け入れ組織のための方法論構築へ向けて ~」,1999
- [3]岡本 栄一,「ボランティアのすすめ 基礎から実践まで」,ミネルヴァ書房,2005

表2. ボランティア活動を始めたきっかけ(%)

友人や知人に勧められて	39
自発的な意志で	17
地域からの呼びかけなどに応じて	11
家族や親戚に勧められて	8
大学のサークルなどで参加する機会があって	6
自分の所属する団体の活動などとして	6
ポスターやチラシなどを見て	3
ボランティアに関する研修会、講習会、催し物などに参加して	0
新聞、テレビなどのマスコミを通じて	0
福祉・教育などの施設の呼びかけに応じて	0
その他	11

表3. 大学生を主体としたボランティアグループでボランティア活動を行う上で問題となる点(%)

授業との両立	18
部活、アルバイトとの両立	17
大学生以外のメンバーとのライフスタイルの差異	11
引継ぎ	11
指示・連絡系統	11
大学生間の責任問題の差異	9
大学生以外のメンバーとの責任意識の差異	8
大学生以外のメンバーとのコミュニケーション	7
大学生以外のメンバーとの知識や技術の差異	4
大学生以外のメンバーとの活動に対する評価の差異	3
大学生と大学生以外のメンバーとの役割分担	3
その他	2